



道の駅「ゆうひパーク三隅」からの眺望

なんでもない風景が語りかける石見

浜田河川国道事務所

所長 石渡 幹夫

「暗いようで明るく、明るいようで暗い」益田出身の作家、田畑修一郎は「風土記 出雲・石見」の中で、石見地方をこう評しています。こちらに赴任して来てから、新緑に色づく山あいを悠然と流れる江の川や、若者で賑わう海浜公園を見ていても、明るい印象を受けこそすれ、「山陰」の「陰」は感じませんでした。冬が近づくにつれ日本海が灰色に変わり、白い頭を高くもたげた波が人気のない浜にうち寄せ、どんよりとした雲に覆われる日々が続くようになると、「なるほどこれが『陰』か」と思ったものです。

明るさと暗さ、陽と陰が入り交じるように、この地方の風景は多様です。いずれも他の地域より優れている、というわけではありません。ただ、出歩いていると、ふとした「なんでもない風景」にしばしば目が止まります。

約一三〇年前、都で一世を風靡した万葉の宮廷歌人・柿本人麻呂は、この地で決して幸せではないだろう晩年を過ごし、そして不幸な死を遂げました。

「石見の海、その角の入江を船が寄せるのによい浦がないと人は見るだろう。よい遠浅の潟がないと人は見るだろう。が、たといよい浦がないにしても、たといよい潟はないにしても……」

との出だしで始まる長歌では、石見の海の風景に重ね合わせて、年の離れた妻を愛おしく思い、偲ぶ歌を歌っています。

今、私たちが見ている風景は、一三〇年前に人麻呂が歩いた時と、大きく変わってはいないでしょう。曲がりくねった起伏の続く道走っていると、ある時、岩場に囲まれて少しばかりの砂浜が広がる海辺を一瞬だけ見せてくれます。海は夏に向かうにつれ群青からコバルトに変わ



高津川と匹見川の合流点



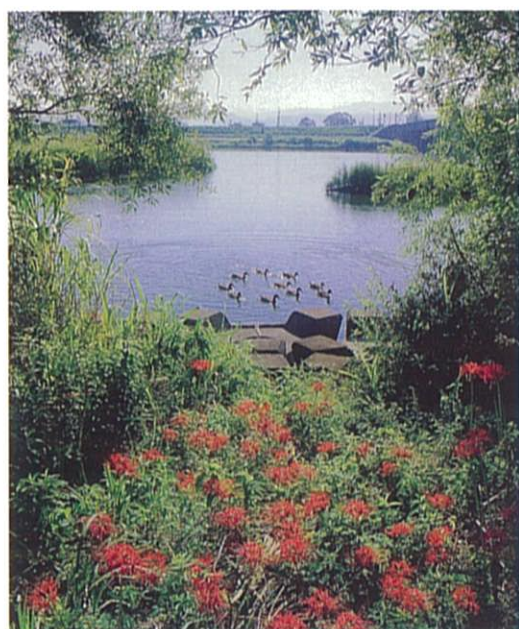
人麻呂神社



大井谷の棚田



人麻呂の銅像



高津川の風景

り、冬には黒へ、と季節ごとに、いや日々、表情を変えます。今日はどんな顔色で、どんな機嫌だろう、と通る度の楽しみになっています。そこには、南国の長々と続く白浜が持つ底抜けの「明るさ」はありません。またある時は、山の中で「百選」のように世間の注目を浴びることはない小さな棚田を見ついたり、赤瓦の家々がひっそりと寄り添っている集落に出会います。新たな道を通る度に、また何か新しい発見があるのでは、という期待を持たせてくれます。

春には江の川の山あいにはうす桃色の山桜が、匹見川では溪谷の岩間にピンク色のキシツツジが、初秋には川べりに真っ赤なヒガンバナが咲きます。赤やピンクと花の色そのものは「明るい」のですが、ずっと変わってこなかった、どことない「暗さ」が備わっているようです。そこにはソメイヨシノの桜堤やコスモス街道の持つ、優雅さや鮮やかさはありません。ただちよつとの間そつとたたずんで眺めたい、とそんな気にさせます。

これまでの歴史で決してメジャーではなかった、そして今後もしないであろう石見。そこにある常に一握りかもしれない人々の心を引きつけてきた、なんでもない風景の数々。私もその魅力に少しだけ触れることが出来たような気がします。